

中国語教育学会会報

第8号(通巻33号) 2003年11月15日発行

下記事務局へのご連絡は郵便で
中国語教育学会
東京都世田谷区桜上水3-25-40
日本大学文理学部中文研究室
郵便振替口座 00110-1-191152

今年度大会は04年3月27日に開催(1面) 会誌第2号への投稿募集、執筆要領掲載(4面)

本会の第2回大会は、前回と同じ日に当たる3月27日(土)に開催することとなった。会場は前回と同じく日本大学文理学部百周年記念館を予定している。学会の今後の発展を考えれば、会場は持ち回りが好ましいのだが、事務局の事前準備の都合上、本拠地を選ぶことになった。大会での研究報告者公募については下記を参照し

されたい。なお、この大会での配布を目標に会誌第2号を発行するので、前号お知らせの通り奮って論文等をお寄せいただきたい。投稿規定、執筆要領は本号4面に再録してある。教学実践報告や研究資料の類も歓迎する。投稿が殺到して、年2回の刊行ができるように願っている。書店に委託した創刊号の売れ行きは好調である。

中国語教育学会2003年12月例会のご案内

12月例会 日時: 12月13日(土) 14時~ [参加費不要・事前申し込み不要]

会場: 東京外国語大学府中キャンパス(東京都府中市朝日町3-11-1)

研究講義棟2階 218小講義室

※交通 JR中央線武蔵境駅で西武多摩川線に乗り換え、2つ目の多磨駅下車徒歩5分。

新宿から京王線飛田給駅下車、循環バスで東京外国語大学東または大学前下車。

⇒右下の略図をご参照ください。

人と題: 三宅登之(東京外国語大学)(実際の使用頻度に基づく文法項目の提示のしかたについて)

中国語教育学会第2回大会報告者公募

日時: 2004年3月27日(土)

会場: 日本大学文理学部百周年記念館

(新宿から京王線で10分、下高井戸駅下車)

日程等の詳細は1月中旬発行予定の次号会報に掲載いたします。午前・午後を通して会員の研究報告会にあてる予定です。発表ご希望の会員は題目のみを12月22日(月)までに申込み、発表要旨(日本語または中国語、1千字以内、フロッピーディスク)を1月10日(土)必着で、それぞれ事務局宛に郵送してください。採否を1月下旬にお知らせいたします。

◆東京外国語大学案内図◆



中国語教育学会 10月、11月例会 記録

以下に、10月例会(10月11日、明治学院大学)と11月例会(11月8日、大東文化大学)における報告概要を掲げる(11月例会については報告者の配布資料から要旨の部分を収録)。

10月例会 報告者：陳文正(日本大学)

陳文正：法英汉语課听课記録

本年2月から3月にかけて、フランス・イギリスにおいて大学や高校等の中国語の教室を訪れ授業を参観したので、その際に撮影した映像記録によって両国の中国語教育の状況を紹介する、として報告されたが、興味深い内容であるため文字記録にまとめていただき、学会誌第2号に連載することを事務局からお願いした。詳細は同誌を参照していただきたい。

11月例会 報告者：呂紅梅(大東文化大学)、高靖(大東文化大学)。

呂紅梅：“好些个同学”について

“些”は不定量詞，“个”は通用量詞。両者在表現和使用上有很大的区别。本文讨论的是“好些个同学”里的“些个”的用法。一般来说数詞与量詞結合才能表示數量，“好些个同学”里的“些个”这种同时并用两个量詞的用法，其中必有一个是起数詞的作用，而另一个则是起量詞的作用。本文认为“好些个同学”里的“些个”的用法，“个”付在“些”的后面不是“些”的后綴，根据句法位置优先说的原理，由于句法位置的变化“些”与“个”起的是不同的语法功能。“个”在这种结构里起的是量詞作用，而“些”则起的是数詞作用，表示不确定的复数。

高靖：文法的なカテゴリーとしてのヤリモライ —中国語との対照を考えて—

個々のヤリモライ文は、それぞれの核となる動詞の連語論的な特性に準拠している。つまり、そのことの研究のためには、「ヲ格の名詞と動詞とのくみあわせ」とか「ニ格の名詞と動詞のくみあわせ」とかというような、連語論の研究成果に照合させることが重要である。そのことによって、現代日本語のヤリモライ文の基本的なルールを明確に一般化することができる。本稿では、筆者は、ヤリモライ研究の現状をふまえて、直接対象のヤリモライを対象にして、「ヲ格の名詞と動詞のくみあわせ」と照合させて、考察してみることとする。

※上記の報告2点は当日配布された資料から要旨の部分を転載したものです。

会費納入のお願い

今年度の会費につきましては、会員各位のご協力により約66%の方がすでに納入済みとなっていますが、未納の方には今回の会報とともに再度のご請求をいたしましたので、お確かめの上お振り込みくださるようお願い申し上げます。前年度までの未納分がある方には併せて(教育協議会分を含む)ご請求しております。行き違いにご納入になった場合は、今回のご請求お許しください。

◆事務局日より◆月例会は1面に予告した12月例会をもって今年度分は終了となる。会場を提供して下さった大学等には心から感謝申し上げるとともに、次年度以降もさらに多くの会員のご協力を得たい。会場についても報告者についても、お申し出を切望する◆今年度の理事会は11月30日に開く予定になっている。懸案の事務局強化策をはじめ、審議の結果は次号に掲載し、来春3月の大会における総会でお諮りする◆

中国国家对外汉语教学领导小组办公室 奥水優

今年、北京は11月初旬に雪が降った、とTVニュースが報じていた。その数日前には私も現地に行ったのだが、高速道路が連日閉鎖になるほど霧が深く、日差しはないのに昼間は20度を越す暖かさだった。北京では、中国国家对外汉语教学领导小组办公室、略称漢办を初めて訪れた。北京動物園から西に向かうと首都体育館がある。その手前の高層ビルの17階に漢办はあった。このビルの1階にはフランス系スーパー“家乐福”が入っている。3年ほど前だったと思うがスーパーが新規開店のころ、筋向かいの新世紀飯店に滞在していたことがある。今回も同じホテルに泊まり、漢办は目と鼻の先だった。3年前は自動車が激しく行き来する大通りを勝手に突っ切ったが、いまは歩道橋がかかっている。

漢办と言えば、かつては北京語言学院を思い浮かべるほど、所在地が語言学院内であるばかりか、スタッフも学院の教職員が主だった。今から2年近く前に現在の方園大厦に移り、中国国家对外汉语教学领导小组办公室は組織として教育部に属すが、教育部部長という閣僚級が組長、副組長には教育部副部長のほか、財政部、國務院華僑辦公室副主任が並び、その他にも外交部、商務部、文化部をはじめ各省の副部長すなわち次官級が名を連ねて、文字どおり“領導”小組となっている。正式な略称となる国家漢办の名が似つかわしい。これは、この機構が「世界に向けて中国語を推し広め、世界各国の中国に対する理解を増進する」という設立趣旨で、中国が国家として世界に向け中国語の普及を図ろうとするセンターであるからだ。もっとも、現在でもHSKの出題など、いわば作業グループは北京語言大学のスタッフにたより、関連の事務室も同大学に所在するようだ。

中国国家对外汉语教学领导小组办公室は、中国国家对外汉语教学领导小组办公室の日常業務を執り行っている。今回、迎えてくださった严美华主任とは、昨年8月の上海における国際シンポジウムで顔を合わせている。私は世界漢語教学学会の副会長として、宴席で同主任と席が近く、言葉を交わす機会があった。漢办は6部門から構成されているが、交流処主任の王魯新氏、考試処副主任の鹿士義氏らが同席された。

話は漢語水平考試(HSK)に集中した。現在、国外では67の都市と地区、国内では25の都市と2特別行政区で試験が行われているという。現在、国外で受験者が最も多いのは韓国で、2万人を越えている。日本は2番目だが3千5百人ほどだそうで、日本における一層の普及を図りたいという期待が述べられた。私は、かねてからの個人的な意見としてHSKに対する注文を率直にお話した。①わが国では、HSKは受け入れの当初からわが国に根付かせるための組織や過程を経ずに、ビジネス先行の嫌いがあったこと。②もともと語言学院のクラス分けテストが基盤にあるためか、語学力より留学生の中国における生活適応力の測定にも傾きがあること。③作題の面で、わが国のセンター入試等から見ると、必ずしも適切とは言えない出題方式が見えること(ただし、問題は公開されていないため一部のことも知れない)。④“題庫”(問題バンク)の質量がともに問われるような出題があり、リピーターが既出の問題にぶつかるという話もあること。⑤国内では受験前の“輔導”によって高得点となる例もあること。⑥学習時間と不釣り合いな高レベルに合格する例があること。⑦国外では漢字文化圏と非漢字文化圏の差を考えないでよいのか等々、受験した者の感想等も引用して話した。

私自身の提案としては、①作題過程や“題庫”について、専門家にはある程度の開示が必要。“題庫”は入れ替えが必要。②国外でも無料の“輔導”や教員対象の研修会が企画されてよい。③基礎レベルでも日本国内の学習者には難しい。受験者に失望感を持たせないためにも第二外国語初級レベルのジュニア版級別テストを新設し、学習を奨励してHSK受験につなげてはどうか。以上のようなリニューアルを図ってほしい旨、話した。前記の鹿士義副主任が《漢語学習》03年4期に発表の論文にも、抽象的表現ながらHSKの検討課題が述べられている。

学会誌第2号原稿募集

学会誌《中国語教育》の第2号を来春3月に開催予定の大会までに刊行の予定である。応募原稿は400字詰め原稿用紙換算で、50枚以内。内容は中国語教育、中国語学に関する研究論文、資料とし、中国語教育の現場での実践報告、調査報告や、書評等も受け付ける。投稿は委嘱原稿以外、すべて理事若干名の査読によって採否を決定する。投稿規定と執筆要領は下記を参照されたい。原稿の査読に一定の時間が必要なため、今回の投稿受付締め切りは創刊号より早め2003年12月10日(水)必着とする。事務局に郵送、または宅配便で送付すること。応募資格は、投稿時点における本会会員に限る。

《中国語教育》投稿規定

1. 投稿は委嘱原稿を除き、中国語教育学会会員の資格を有する者に限る。
2. 投稿は中国語教育・中国語学に関する論文、資料、書評その他で未公開のものとする。
3. 投稿原稿の採否は査読によって決定し、投稿者に通知する。採用の場合も、必要に応じ原稿の修正を求められることがある。(当分の間、査読は複数の理事によって行う)
4. 投稿は郵送または宅配便により、中国語教育学会事務局宛に指定の期日までに送付する。
5. 投稿はフロッピーディスクによるものとし、その内容をプリントアウトしたものを3部同封しなければならない。
6. 採否の通知その他の連絡用に住所・電話番号・電子メールアドレス等を別紙で同封する。
7. 送付されたフロッピーディスクとプリントは採否にかかわらず返却しない。
8. 原稿料は支払わない。発行後、抜刷30部を無料で進呈する。
9. 原稿の執筆にあたっては、別に定める《中国語教育》執筆要領に従うものとする。

《中国語教育》執筆要領

1. 原稿は日本語・中国語・英語のいずれかで執筆する。
2. 原稿はタイトル、執筆者名、執筆者の所属機関、サマリー、本文の順に記す。
3. タイトルは本文と同じ言語を使用する。日本語、中国語のタイトルには別紙にその英語訳を付す。
4. 執筆者名にはローマ字表記を併記する。
5. サマリーは本文と異なる言語を使用し、日本語、中国語の場合は400字以内、英語の場合は400語以内を基準とする。
6. 本文の字数は図版等も含め、20,000字以内(400字詰め原稿用紙換算で50枚以内)とする。(原稿末尾に本文総字数を付記する。)
7. 原稿はWindows上で動作するワープロまたはエディターを用い1ファイルとして作成する。
8. 字詰は編集段階で変更することがあるので、変更後も行頭・行末等の位置が乱れないように作成する。ワープロソフトによる自動箇条書きや自動段落番号挿入機能は使用しないことが望ましい。また、原稿に図版が入る場合は図版の位置が字詰変更後も大幅にずれないように特に留意する。
9. フォントの大きさは原稿を通じて統一する。原則として外字は使用しない。
10. 例文は出典を明らかにし、作例の場合はその旨を明記する。
11. 注・参考文献・例文出典一覧等はそれぞれ本文末に一括して付す。脚注は用いない。
12. 参考文献は著者名(編者名)、発行年、論文名(書名)、掲載誌名および巻号数、出版社名等を明記する。

(付記) 上記の《中国語教育》投稿規定と執筆要領は第2号原稿募集に暫定的に適用するものであり、今後さらに理事会と総会の審議により変更されることがある。